

## ラテンアメリカ都市物語

＝第24回＝

# ベレンーマンゴー並木の 町の移り変わり

堤 剛太

サンパウロから、アマゾン河々口の町ベレンへと移り住んだのは1977年の年だった。

当時親しくしていたブラジル人が、「ベレンへ行くなら拳銃をプレゼントするよ」と、言ってくれた。「どうしてかい」と聞くと、「あそこには、インディオ<sup>(注)</sup>やジャカレー(鱷)、オンサ(豹)がいるらしいぞ」と、答えが返ってきた。が、恐る恐るやって来たベレンの町には、そんなものは何もいやしなかった。今から、44年前の話である。

1960年に、国の首都がリオデジャネイロから内陸部のブラジリアに遷都されたことで、ブラジリアからベレンまでを結ぶ、2,000kmの道路が建設された。これにより、リオデジャネイロやサンパウロなどとベレンは陸路で繋がったのだ。開通から5年後の1965年に、サンパウロからこの国道を2台のトヨタの四輪駆動車に分乗し走破した日系人調査隊の記録がある。当時、道路はまだ未舗装でブラジリア～ベレン間を走るバスは、一日に1台しか通らず4日間の行程だった様だ。今は2日以内に到着する。ベレンまで、残り160km付近に広がる森林地帯には、ゲアリバー(吠え猿)の集団が見られ、インディオの打ち鳴らす太鼓と歌声が、森の奥から聞こえてきたと言う。今では、この辺りに森林地帯など跡形も残っていない。1960年代、陸路伝いに内陸部を車で走るのはまだ冒険の時代だったようである。

では、それ以前の交通手段はというと、飛行機または船舶であった。当時は飛行機に一般の人が気軽に乗れる時代ではなく、客船で移動する以外に方法はなかったのだ。4,000トン級の国内船が、首都リオ

デジャネイロを出港すると、大西洋沿岸の各都市を経由して北上するので、ベレンまで11日間の船旅だった。

これは英国のリバプール港を出航し大西洋を渡りベレン港へと到着する日数とほぼ同じであった。欧州からベレン、マナウスまでのアマゾン定期航路は、このブース汽船の他にドイツのロイド汽船も航行していた。



写真1：歴史あるオペラ劇場（写真はいずれも筆者撮影）

ベレンは19世紀から20世紀初めにかけて天然ゴムの積出港として栄えた町で、最盛期には年間4万2,000トンを超えて国外へ輸出していた。町はゴム景気で栄え、1878年にはネオ・クラシック様式のオペラ劇場(平和劇場)までが建設されている。マナウスのアマゾン劇場の方が有名であるが、実はベレンの平和劇場の方が18年も先に建設されているのだ。この他、ベレンと近郊の町を結ぶ全長233kmのブラガンサ鉄道も1883年に開通している。

日本初の鉄道が敷設されたのが、1872年の新橋～横浜間(29km)なので、それから僅か11年後にはアマゾンの町に、当時の最新文明の利器である蒸気機関車が走っていたのだ。



写真2: ベレンの街に残る欧風の建物

欧州とベレンとが船で直接繋がっていたことから、人や物資の流通の他に文化も早い時代からこの町に入ってきていた。ベレンの町はブラジルの南部先進地帯よりむしろ欧州との繋がりが深く、第二次世界大戦前までは欧州の文化を色濃く残す古都であった。ブラジルの先進地帯に住んでいる一般市民が、北部アマゾンの町の情報を正確に知ようになるのは恐らく1990年代に入ってからのことであつたろうか。冒頭に記した、拳銃プレゼントの話も、当時のサンパウロ市民が抱いていたアマゾンに対するイメージとしては納得がいくものである。

ベレンを紹介する時によく使われるのが「アマゾ



写真3: アマゾン河支流を渡るフェリー

ン河々口の町」と言う表現だが、実はゴール地点の海(大西洋)まで出るのに未だ200km近い距離があるのだ。東京湾に注ぐ一級河川の荒川を例にすると、埼玉県の秩父市にまで遡る距離に相当し、そんな所を荒川河口の町なんて日本の人は誰も言わないだろ

う。壮観なのはゴール間近の河幅で、これが尋常でない広さで最大の幅が300kmほどもある。おまけにその河の中洲であるが九州程の面積を持っているのだ。その中洲をここではマラジョー島と、島扱いで呼んでいる。

このマラジョー島周辺で発生するのが、有名なポロロッカ現象である。アマゾン河から大量に吐き出される水と満潮の海水とがぶつかり合い逆流現象を起こすもので、波の高さは6mを超し、内陸部へ600kmも遡って行くのだ。河口から200km遡行したサン・ドミンゴス・ド・カップインという町では、町の周囲を流れるアマゾン河支流のカップイン川で発生するポロロッカを利用して、毎年サーフィン大会が開催されている。津波が200km先まで押し寄せて来たようなものであろうか。また大西洋の潮の満ち引きは、ベレンの波止場まで影響を及ぼし、雨期の大潮時期には増水した湾の水が街中に流れ込み、栈橋付近の道路が冠水し車が通れなくなる程である。



写真4: 奥地で出会った少女

船が主流の時代には、アマゾンの表玄関として名を成したベレンだが、車や航空機の時代に入ると、いつの間にかアマゾンの裏庭的な存在に追いやられてしまった。特に、観光面ではPR上手なマナウスの後塵を拝している感がある。以前、パラ州政府は本気を出して観光客の誘致や施設整備に取り組み、観光局のホームページには英語版や日本語版まで立ち上げていた事がある。しかし州のトップが代わると方針も変わるようで、その後の政権下では動きがストップしている。もっとも、今はこのコロナ禍で観光事業どころではないのかもしれないが。

パラ州は、ブラジルで2番目の大きさを誇る州

で日本の国土の3.3倍の面積がある。これだけ広大な土地に、人口は僅か800万人しか居住していない。それだけに、150万の人口を擁する州都ベレンのように、高層ビルが建ち並び、道路は車で溢れかえる近代都市から、今でもマラリアやデング熱に脅かされ、金採掘人とインディオとが武力衝突を繰り返す様な奥地など、混沌とした非日常の生活とが混在する実に多様性に富んだ州である。



写真5：観光名所に生まれ変わった埠頭

ベレンの町は、ここ20年ほどで急速に発展を遂げてきている。様々な分野で、南部の資本が流入してきたからだろう。例えば、大型スーパーマーケットの進出やショッピングセンターの開設がそうである。街中のショッピングセンターは長らく3か所だったが、今では倍の6か所に増えている。ホテルの数も、ここ数年で倍くらいに増えただろう。

南の巨大な資本が次々に入ってきたことで、人々の生活様式も大きく変化して行った。私がこの町に来た当初は、企業や商店の昼休みが2時間あった。家に帰ってシャワーを浴び、昼ご飯の後少しの昼寝



写真6：マンゴー並木の目抜き通り

をして、また職場へ戻るのが普通のパターンであった。

また午後から定期的に降ってくる雨に遭遇すると、通行人は軒先や生い茂ったマンゴー並木の下に身を寄せ、小降りになるまで雨宿りをしていたものだ。だが今時2時間の昼休みを取っている職場はまれである。また、雨が降り出しても中国製の安価な傘をさして皆、せかせかと通りを歩いている。あの頃は、実にゆったりと時が流れていたのだ。

町の変貌は、市民の生活様式だけではなく思ってもいなかった犯罪面でも、顕著にその影響が現れてきている。一昔前までは夕方になると家の前の歩道に腰かけを出し、のんびりと夕涼みを楽しむ習慣があった。今ではそういう光景を目にすることがなくなってきている。これは、強盗が街中でやたら増えてきたせいである。うっかり家の前で涼んでいると、車やオートバイに乗ったピストル強盗に襲われるケースが急増したのである。

この他、深夜、銀行のATMをダイナマイトで爆破し現金を強奪したり、自動小銃や短機関銃で武装した集団が現金輸送車を襲ったり、高級アパートに侵入し上の階から下の階まで根こそぎ現金、貴金属を奪って行く等の荒っぽい犯行が昨今多発している。これは、アクセスが容易になったベレン目指して、仕事を求め転入してくる国内移住者だけでなく組織犯罪グループまでもが北上して来たせいである。

これら国内移住者のほとんどは、町外れに形成されているファベラ(スラム)に落ち着く事から、年々ファベラの規模が拡大している。ベレンの失業者は、2020年の統計で10万人を超えている。失業者・貧困者層の増大が起因し犯罪率が高くなったことや、麻薬が青少年間に蔓延してきたことなどに警察は一時対応が伴わず、2007年には世界の犯罪都市ワーストランキングのトップ(10万人当たり77件の殺人)を飾ったことがある。その後は防犯カメラの設置や警察力の強化などが功を奏し、治安は大分改善されてきた。とはいえまだ世界のワーストランキングからは抜け出せないようで、2019年で12位(65.31件)の不名誉な位置に留まっている。世界的にはサンパウロやリオデジャネイロの犯罪多発の方が有名だが、人口比から言えばこの二大都市の方が割と安全な町なのである。

アマゾン地方らしい犯罪としては、日系人の主要

栽培作物であるピメンタ（胡椒）泥棒が、国際価格が上昇する度に横行することだ。ピメンタ倉庫を狙ったり、運搬のトラックごと品物を奪ったりするやり方である。地方の警察力は当てにならないので、襲われたら泣き寝入りするだけである。この他、河口付近に出没する海賊がいる。正確には海でなく河なので河賊とでも云うのだろうか。先に記したが河口の広い部分は東京～豊橋間程の距離があり、しかも大小の島が何百とあるので、襲った後逃げ込む先は幾らでもある。こちら狙われたらお手上げの状態だ。ある日のこと、世界一周旅行中の日本人男性が船で対岸のアマパー州へ向かうと挨拶に来たので、「気を付けて行ってらっしゃい、海賊に襲われないように」と、軽い気持ちで送り出したら、本当にこの被害に遭いベレンへ戻ってきたのはこちらが驚かされた。所持品はもとより、履いていた靴やシャツまで身ぐるみ剥がされ、這う這うの体で舞い戻ってきたのだ。毎日毎日、船が襲われている訳ではないのに、その人はよほど運が悪かったのかもしれない。

私も、過去2回ピストル強盗の被害にあっている。強盗の被害に遭う人は、不思議に何度も遭うようで、すでに4回やられているという年配の日系人とその日行動を共にしていて、私も巻添えを食ったのが最初の体験であった。夜にカラオケ店から出てきた所をいきなり4人組の男たちに取り囲まれ、ピストルを腹に突き付けられたのだ。初めての経験だったので、咄嗟に状況がのみ込めず一瞬きょんとしてしまった。横を見ると、その日系人が慣れた仕草で両手を挙げていたので、「そうか!」とこちらも見習ったことを覚えている。おかげで2度目は落ち着いた行動をとることで、被害を最小限に留めることができた。何事も経験だが、さすがに3度目は願い下げにしたい。

こういうことを書くと、ベレンは怖い町と言う印象を持たれるであろうが、何事も予防である。即ち危ない場所や時間を避け、家の入り口や窓には鉄格子を嵌める、夜に車の乗降をする時には、近くに怪しい者は居ないか周囲を警戒する・・・それに何度も被害に遭っている人とは一緒に行動しないことも肝心かもしれない。もっとも予防だけでは避けられない面は多々あるが、そう神経質にならず毎日を過ごすしかない。パラエンセ（パラ州の人）は、概して人が良く、ホスピタリティに富んでいるので、犯罪さえ減少すれば実に暮らしやすい町なのだ。

ところで、最近少々気になることがある。ここ10数年程前から、中国人がベレン市内に急増していることだ。サンパウロからやって来たこれらの中国人は、町で商売を営んでいる。この他州立大学では孔子学院の助成で中国語講座を2012年に開設している。州政府も中国との経済交流に力を入れ始め、歴代州知事や大学学長なども招待を受け中国を訪問している。州政府はこれまで永く日本に置いていた軸足を、どうやら中国へ踏み換えようとしている様にも見える。遠大で大規模な計画を立てるのが得意な中国は、資源豊かなパラ州が自国にとって将来有益な地と見做し、着々と布石を打ち始めたのだろう。一方、我が日本国は中国の方針とは違い、経費削減とかの名目で2013年に歴史あるベレン総領事館を閉鎖し、辛うじて領事事務所を残している様な状況である。1929年に日本人移民が当地に入植して以来、日系移民の牙城と誇ってきたパラ州だが、やがて中国人社会が台頭してくるであろうことは、当地日系社会、強いて言えば日本国に果たしてどの様な影響が出てくるのだろうか・・・ こういう変貌も、淡々と受け入れるしかないのだろうかと思わずにいられないのが、現地の我々日系社会のいつわらざる気持ちなのである。

(つつみ ごとた 汎アマゾン日伯協会副会長。東京農工大学客員教授)

編集部注：現在は先住民をこういう表現で呼びませんが、当時の言い慣わしを表した筆者の意向を尊重して原文のままとしました。



## 『スペイン語で迎える日本人の死生観 —蜘蛛の糸・城の崎にて 他6編—』

伊藤 昌輝訳 フェルナンド・バルボサ協力  
2022年4月 大盛堂書房 189頁 1,700円+税 ISBN978-4-88463-127-7

本書は芥川龍之介「蜘蛛の糸」、宮沢賢治「よだかの星」、幸田露伴「印度の昔話」、志賀直哉「城の崎にて」、松尾芭蕉「閑閑の説」、良寛・貞心尼 唱和歌「蓮の露」のほか、「梁塵秘抄」および「閑吟集」（抜粋）の日西対訳版である。日本はこれまで世界が経験したことのない高齢化を迎え、死の問題は、個人の問題だけではなく、社会の問題ともなりつつある。また最近世界を席卷した新型コロナウイルス感染症の蔓延により、突然命を落したり、親子・夫婦など、愛する人と別れる苦しみを味わうことも珍しくない。現代に生きる者にとって、死といかに向き合うかは大きな課題である。一神教徒からみるかぎり、日本人の宗教心は「融通」と「曖昧さ」に満ちているかもしれないが、日本人の多くはむしろ宗教心が豊かであるといえよう。そこで本書では日本人が心に育て続けてきた宗教心、死生観を世界に伝え得る日本の古典的作品8編が選ばれている。

本書は、既刊の日本語とスペイン語の対面バイリンガル書籍『スペイン語で愛でる万葉集』（2020年）、『スペイン語で奏でる方丈記』（2015年）、『スペイン語で詠う小倉百人一首』（2016年）、『スペイン語で旅するおくのほそ道』（2018年）および『スペイン語で親しむ石川啄木 一握の砂』（2017年—以上いずれも大盛堂書房刊。本誌でもそれらの多くを紹介している一連の著訳書の最新の一巻である。 (著者—伊藤 昌輝)



## 『「トルコ人」たちの百五十年 —中東とラテンアメリカを結ぶ—』

飯島 みどり 影書房  
2021年12月 194頁 2,200円+税 ISBN978-4-8771-4490-6

本書は科研費によるレバノン・シリア移民をテーマに、2009～16年に行った共同研究（代表は黒木英充東京外国語大学教授）の中で、著者（ラテンアメリカ近現代史を専攻する立教大学異文化コミュニケーション学部准教授）が担当したラテンアメリカ8か国での調査成果を私的に纏めたもの。なお、書名の「トルコ人」は、旧オスマン朝の発行する旅券等を携行してきた、現在のレバノン・シリアから移民してきた人たちとその後継世代を指すラテンアメリカでの俗称。第一部では、メキシコ映画界の1940年代全盛期を支えた二人のレバノン人映画監督とのインタビュー、メキシコでレバノンのカトリック・マロン派の隠者聖チャルベルを祀る教会が増え土着化したことの解説、レバノン人のギリシャ正教アルゼンチン府主教がシリア内戦をどう見ているかについての著者によるインタビューを載せている。第二部にはグアテマラ出身のレバノン系作家エドゥアルド・ハルフォンの短編3編の著者による訳をのせ、第三部では著者が調査地で撮影したドキュメンタリー映画2本の関連資料、さらに韓国の釜山外国語大学イペロアメリカ研究所主催のラテンアメリカ社会のアイデンティティ国際学術講演会での著者のスペイン語講演を載せている。

著者が関心をもつラテンアメリカへ中東地域から生活拠点を移していったレバノンやシリアなどの人びとの一世紀半の足跡の一端を、映画や小説等を媒介させつつ辿ろうとするこれまでの論考等を集めたユニークな論集。 (桜井 敏浩)